

祈るために、午後三時に宮に出かけたペテロとヨハネは、その門のところで「生まれつき足のなえた人」に出会いました。この人は、ペテロたちに施しを求めましたが、ペテロは、お金をあげる代わりに、主の御名によって彼をいやしてあげたのです。そのことがきっかけとなり、その後、宮の中にいたペテロたちのもとに大ぜいの人が集まってきました。ペテロは、彼らに向かって、主イエスのことを例にあげ、死者の復活について語ったわけですが、それによって多くの人が、主への信仰へと導かれたのです。

ところが、その騒ぎを知ったユダヤの指導者たちが現場に駆け付けて来て、ペテロとヨハネに手をかけて彼らを捕らえました。それは、ペテロたちが死者の復活について人々に教えていることに、指導者たちが困り果てたからです。彼らは、ペテロたちにこう尋問しました。「あなたがたは、何の権威によって、また、だれの名によってこんなことをしたのか」と。

この時も聖霊に満たされたペテロは、相手が指導者たちであるにも関わらず、彼らに向かって大胆に主の死と復活を語ったのです。けれども、ペテロのことばに彼らは耳を傾けようとせず、ただ「今後、誰にもこの名によって語ってはいけない」と厳しく戒め、また、おどした上で彼らを釈放しました。というのも、この出来事を通して人々が神様をあがめていたので、群衆の手前、ペテロたちに手荒なことができなかったからです。

そのようにして釈放されたペテロとヨハネは、その後、仲間たちのところに行きます。それが今日のテキストです。23節「祭司長たちや長老たちが言ったことを残らず報告した」。この報告の内容については、ここには記されていませんので、これまでの流れから推測するしかないのですが、でも「祭司長たちや長老たちが言ったことを残らず報告した」ですから、当然、そこには「おどし」の言葉が含まれていたと思うのです。

どうぞイメージしてみてください。「今後、主の名によって語ってはいけない」と戒めた指導者たちの「おどし」とは、どのようなものだったと思いますか？「おどし」ですから、当然、ペテロたちが身の危険を感じるような言葉であったに違いありません。例えば「次の時には、むち打ちにするぞ！」とか「お前たちの仲間をみな牢に入れるぞ！」といった言葉、もしかしたら「おまえたちの指導者イエスのように、おまえたちも十字架にかけるぞ」とまで言っていたとしても、不思議ではないと思うのです。

ペテロやヨハネのように、もしあなたがこの世の権力をもつ人々から、そのような「おどし」を受けたなら、どうしますか？または、この仲間たちのように、そのような報告を受けたら、あなたならどう応答するでしょうか？警察に通報しますか？他の権力者に助けを求めますか？それとも「やられたら、やり返えす」と自分の力で対抗しようとするでしょうか？ペテロとその仲間たち、つまり、教会はどう応答したのでしょうか？

24-30節「これを聞いた人々はみな、心を一つにして、神に向かい、声を上げて言った。『主よ。あなたは天と地と海とその中のすべてのものを造られた方です。25 あなたは、聖霊によって、あなたのしもべであり私たちの父であるダビデの口を通して、こう言われました。『なぜ異邦人たちは騒ぎ立ち、もろもろの民はむなしいことを計るのか。26 地の王たちは立ち上がり、指導者たちは、主とキリストに反抗して、一つに組んだ。』27 事実、ヘロデとポンテオ・ピラトは、異邦人やイスラエルの民といっしょに、あなたが油をそそがれた、あなたの聖なるしもべイエスに逆らってこの都に集まり、28 あなたの御手とみこころによって、あらかじめお定めになったことを行いました。29 主よ。いま彼らの脅かしをご覧になり、あなたのしもべたちにみことばを大胆に語らせてください。30 御手を伸ばしていやしを行わせ、あなたの聖なるしもべイエスの御名によって、しるしと不思議なわざを行わせてください。』」。

24節に「これを聞いた人々はみな、心を一つにして、神に向かい、声を上げて言った」とあります。ここには「祈った」という言葉は出てきませんが、その後の31節には「彼らがこう祈ると」と記されていますから、彼らは祈ったのです。指導者たちのおどしに対して、どうしたらこの状況から脱することができるのかと相談し合い、良い方法を考え出したのではなく、彼らは心を一つにし、主に向かって声を上げて祈りました。

では、その祈りの内容はどのようなものでしたか？まず彼らは、主こそ、天地万物の創造主であられること、つまり、すべての権威の上におられる方であることを告白しています。それによって、人間的な権力をもって自分たちをおどす指導者たちよりも、自分たちが信頼し、聴き従っている主の方が、遥かに力強いお方であることを覚え、この方に自分たちの身をゆだねているのです。

そして次に、その主が、聖霊によってダビデの口を通して語られたみことばに、今自分たちの身に起こっていることの意味を問うています。25-26 節「なぜ異邦人たちは騒ぎ立ち、もろもろの民はむなしいことを計るのか。26 地の王たちは立ち上がり、指導者たちは、主とキリストに反抗して、一つに組んだ」とは、詩篇 2:1-2 からの引用ですが、このことが主の御手と御心のうちにあることを彼らはみことばから確認するのです。

そして、その預言のことばは、ヘロデとポンテオ・ピラトが、異邦人やイスラエル人（ユダヤ人）といっしょになって、神様が油そそがれた聖なるしもべ、つまり、主イエスに逆らい、彼を十字架につけたことで実現したと理解しています。27-28 節のところですか。もしかしたら、弟子たちはこの時、ヨハ 15:20 の主のおことばを思い出していたのかもしれませんが。「しもべはその主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたにいったことばを覚えておきなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。…」

では、このようにして、みことばからそこで起こっていることを理解することは、その後の彼らの祈りにどのような影響を与えているのでしょうか？もう一度、29-30 節を見ます。「主よ。いま彼らの脅かしをご覧になり、あなたのしもべたちにみことばを大胆に語らせてください。30 御手を伸ばしていやしを行わせ、あなたの聖なるしもべイエスの御名によって、しるしと不思議なわざを行わせてください」。

彼らは言いました。「主よ。いま彼らの脅かしをご覧になり」と。つまり、彼らは、指導者たちの「おどし」を、そのまま「おどし」として受け取っていました。ですから、私たちをして「彼らはペテロとヨハネだから…」とか「あのペンテコステを経験した人たちだから、何があっても彼らには、それに打ち勝つ力があつた」などと他人ごとのように言うのは、あまりに浅はかな受け取り方だと思うのです。彼らは確かに自分たちは脅かされていると理解していました。でも、だからこそ、彼らは続けてこう祈ったのです。「あなたのしもべたちにみことばを大胆に語らせてください」。

あなたなら、このような祈りになると思えますか？いや、まずそこで祈るでしょうか？仮に祈ったとして、その祈りは「相手を変えて下さい」「私を助けて下さい。守って下さい」と、自分の身の安全を求めるものではなく、「みことばを大胆に語らせて下さい」と、福音を宣べ伝える機会として主に用いていただくような求めるになると思えますか？

初代教会の人々は、自分たちが誰によって、また、どのようにして救われたのかを知っていました。自分たちが何のために救われ、何を成すべきかを知っていたのです。つまり、それは、みことばを大胆に語ることで、地の果てにまで主の証人となることでした。そのようにして、主の福音を聞くすべての人が、悔い改めへと進み、主への信仰によって救われるためです。そのためにこそ、自分たちにはキリストを証する力が、つまり、聖霊が与えられていることを彼らは知っていました。

ですから、この「みことばを大胆に語らせてください」の後には、「御手を伸ばしていやしを行わせて…」とありますが、それは、みことばを語ることと関係のないことを言っているのではなく、そのことを通してキリストを証する機会が与えることを切に求めているのです。事実、この時も、生まれつき足のなえた人に行われたいやしのわざから、すべてが始まりました。それを通して、主が証され、人々は救いに預かったのです。

このように祈った弟子たちに、主もまた答えられます。31 節「彼らがこう祈ると、その集まっていた場所が震い動き、一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語りだした」。この「集まっていた場所が震い動いた」理由は、地面が揺れたからか、それとも、ペンテコステの日に弟子たちが経験したような激しい風によってであったのかはわかりません。でもその時、一同は聖霊に満たされたのです。そして、神のことばを大胆に語り出しました。私はここに聖霊に満たされること、その力を期待して、いつでも主に祈ることの重要性を見ます。なぜなら、「聖霊の満たし」なしには、誰もみことばを大胆に語ることはできないからです。

聖霊は、世に対して罪、義、さばきについてその誤りを認めさせるとありますが、その聖霊の助けなしに、どうやって私たちは罪、義、さばきについて理解と確信を深めることができるのでしょうか？また、それらがわからなければ、どうやって栄光の主を心からほめたたえることができますか？主イエスの栄光は、その十字架の死と復活を通して現されましたが、その福音のすばらしさを知らずして、私たちはどうやってこの世の人とは違った、光の子どもとしての歩みができるのでしょうか？

聖霊に満たされ、みことばを大胆に語った人々は、それをただ口で語ったのではなく、生き方を通して語る者となりました。つまり、神を愛し、隣人を愛する群れとして、彼らはその生き方（歩み）を通してのみことばを語ったのです。このことは2章にも記されていましたが、ここでも 32-35節で記されています。

「信じた者の群れは、心と意思を一つにして、だれひとりその持ち物を自分のものと言わず、すべてを共有にしていた。33使徒たちは、主イエスの復活を非常に力強くあかしし、大きな恵みはそのすべての者の上にあった。34彼らの中には、ひとりも乏しい者がなかった。地所や家を持っている者は、それを売り、代金を携えて来て、35使徒たちの足もとに置き、その金は必要に従っておのおのに分け与えられたからである」。

ここで言われていること、それは「持ち物を共有しなさい」という命令ではありません。彼らはそのように強制されたから、そうしたのではなく、聖霊に満たされ、心と意思を一つにすることで、彼らのうちから自発的にそのような真の交わりとしての愛の生き方が生じてきたのです。そして今は開きませんが、その後の36-37節には、その群れの中に、バルナバもいたことが記されています。この人は、使徒パウロの回心後、彼の助け手となった人です。

皆さん、あなたはどのような時に、自分のものを自発的に他者に分け与えたいと思いますか？それは、あなたの内側が満たされている時ではないですか？もっと言うと、心に喜びがある時に、私たちは進んで分け与えなくなるのではないのでしょうか？主は言われました。ヨハ 15:11「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたの喜びが満たされるためです」。

この時、主が話されたこと、それは「ぶどうの木の譬え」のところですが、「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました。わたしの愛の中にとどまりなさい」（ヨハ 15:9）ということです。主イエスの愛の中にとどまるなら、私たちは主の喜びで満たされます。なぜなら、主に愛れていることがわかるからです。では、主はどのようにして私たちを愛して下さいましたか？主は、私たちのために十字架にかかり、神のさばきを身代わりとして受け、その死をもって私たちを滅びから贖い出して下さることによってです。

でも話はそこで終わりません。主は予告された通り、三日目に死人の中からよみがえられたのです。そして、ご自分を信じる者に今日も永遠のいのちを約束して下さいます。33節に「使徒たちは、主イエスの復活を非常に力強くあかしし、大きな恵みはそのすべての者の上にあった」とありますが、私たちをして、主イエスの復活を非常に力強くあかしさせて下さるもの、それは聖霊です。そして、主の復活が力強くあかしされる場所、つまり、みことばが大胆に語られるところでは、主の大きな恵みが人々の上にあるのです。「みことばを大胆に語らせてください」と祈り求めようではありませんか。主は聖霊（の力）をもって、そのことをさせて下さいます。